

1 お姉さんから届いたメール

十月始めは夜風に当たると少し寒さを感じますが、まだ二階の部屋にエアコンは点けていません。

私達が住む二階建の建物はお義父さんがご存命中は、農器具を保管する作業場として使われていたが、コメの価格低迷や靖文さんが会社員として就職したこともあり、結婚に併せて殆どの農機具を処分し、一階は3台の駐車場所になり、二階は私たちが住むためのリビング、勉強部屋、寝室、洗面台・トイレ等に改装しました。

また、勉強部屋は夫が机、椅子を置き、毎夜9時から11時まで、パソコンや書籍で仕事に関連する○○の資格取得を目指していますが、私も夫に併せてその場所に机、椅子を置き、費用は掛かりますが夫とは別のパソコンを用意使っています。

その日の夕方、山道の土手に彼岸花が沢山咲く場所があり、6本摘んで、3本を母屋の居間の花瓶に挿しました。

残り3本は母屋の炊事場の水を入れたバケツに挿して、午後10時頃、二階に上がるときに軽食と一緒に持って上り、リビングの花瓶に挿しました。

その後、私もパソコンを使っていました。午後11時になり夫に声を掛けました。

「ビール準備してもいい?」

「アッ、11時か。もう止めよう。」

二人でリビングに移ると、ペンダントライトの下で花瓶に挿した彼岸花が鮮やかに輝くなか、母屋から持って来た軽食を並べ、リビング内の冷蔵庫から取り出した缶ビールを二人が愛用のグラスに注ぎ、乾杯して呑み始めました。

「母は来週火水木に四人組で京都旅行に行くと言っていたよね?」

「うん、今回は京都のお寺を中心に二泊で観光するんだって！ 四人が集まると楽しい旅行になると思うわ。」
「それがね、帰りに姉からメールが来てね。昨日母からの電話で、来週火水木に旅行に行くと言っていたけど、その3日間の内の1日、昼間に家に寄ることが出来ないか問い合わせがあつたんだ。もし可能ならあかねにも再度、行つてもよいか訪ねて欲しいと言うんだ。」

「あの件、連絡が来たのね。混乱はするけれど私は前に言つた通りでいいよ。」

「そうか、それなら自分も年休が貯まっているから、水曜日に休みを取ろうと思うけどいいかい？」

「うん、水曜日でいい。」

「それじゃ水曜日でOKとメール送るよ？」

「うん、送つて。」

……

……

……

「よし、送つた。」

二人でビールを飲んでしていると間もなく返信のメールが届きました。

「メールありがとう。あかねちゃんもありがとう。水曜日午後1時過ぎに行きます。場所は子ども部屋でいいよね。一緒に時間を過ごせたらと思います。何かあればメール下さい。」

と言うものでした。

「会うのはまた子ども部屋でいいかい？」

「いいけど、靖文さんはどうなの？」

「そうだなあ、子ども部屋だと部屋を元通りにしたとしても母がこの部屋に入ったとき、最近何かで使つたのかと不思議がるかも知れないし。もし来客があれば慌てて服を着るのもどうかと思つて。」

「二階の私たちの寝室を使いたいの？」

「いや、家(うち)ではなくて郊外のファッションホテルでもどうかと思つて。」

「それは嫌！ ファッションホテルに三人で入る所を他人に見られたら… 私、絶対嫌なの。」

「そうか。」

「今回SEXをして良かったら、一度では終わらないと思うのよね。だから、私たちの寝室にお姉さんを招いてもいいよ。」

「いいかい？」

「うん、いい…」

「ごめん、無理を言うね。」

お姉さんが来ることに私達の寝室を使うことを夫は私に遠慮していることを内心分かっていました。

夫は、「来週の水曜日、二階で自分とあかねが楽しみに待ちます。」と書いてメールを送りました。

その後二人で缶ビールを数本空けた後、寝室に移り、洗腸プレイをしてからバイブを使って楽しんだあと、「愛の折檻」を一時間ほど続けて、15分を超える性交を重ね、その後眠りにつきました。

2 お姉さんのこと

翌金曜日の夜、三人が順にお風呂を済ませて食事をとり、夫は二階でいつも通り午後9時から勉強を始めて、私も午後10時を過ぎて二階に上がって行きました。

「あら靖文さん、勉強はどうなの？」

パソコンや本は開かれず、机の上にスマホのみが置かれていました。

「今まで姉とメールをしていてね。今日は勉強が全然出来なかったよ。」

「お姉さんとどんな話をしたの？」

「うん、これを見て。」

夫がスマホからメールを開き読ませてくれました。

姉「水曜日は無理を言いうわね。着いたら二階に上がります。家にあるコンドームを持っていくわね。」

夫「自分のものを使うからいいよ。」

姉「それならそうして。あかねちゃんにも無理を言うわね。」

夫「あかねも嬉しいと思うよ。今回はSEXが中心と思うけど洗腸もしていいかい？」

姉「そうね、それもしたいわ。ところで洗腸器はお母ちゃんのを二階まで持って上がるの？」

夫「お姉ちゃんには言っただけで、二階に200ccのガラス製浣腸器を買ってね、あかねと二人で使っているんだ。」

姉「大型ね。けどそんなことじゃないかと思ってたの、あなたとあかねちゃん。」

夫「孝二さん(お兄さん)のことはこの際、考えなくてもいいよね。」

姉「いいわ。私もその日は全てを忘れて私だけの時間に浸りたいの。」

夫「そうだね、自分達もそれでいい。」

姉「少し聞きづらいことだけど、あかねちゃんとアナルセックスはどうなの?」

夫「アナルセックス? それは無いよ。お姉ちゃんはあるの?」

姉「主人が好きでね、以前からして来たの。今でもバイブを使って私のお尻を楽しんでいるのよ。」

夫「痛くはないかい?」

姉「慣れると気持ちがいいのよ。痛いのは最初だけよ。」

夫「そうか、それなら女性器にもバイブを使っているんだろう?」

姉「そうね、それも気持ちがいい。バイブにクリを責める部分が付いているの。」

夫「なんだ、それじゃわざわざ自分たちと3Pをしなくても、夫婦だけですればいいじゃないか。」

姉「仕事や主人の看護に疲れるとどうしても男性器が欲しくなるの。ただ第三者とはリスクが大きくてイヤなの。」

夫「わかった、三人だけの時間にしよう。」

姉「ありがとう。」

夫「お姉ちゃん、一つ聞かせて。」

姉「なに?」

夫「週2回、孝二さんには排便のため浣腸をしていると言っていたけど、浣腸プレイはどうなの?」

姉「結婚以来、今もずっとよ。」

夫「ずっとと言うと、お姉ちゃんが孝二さんにもされているということ?」

姉「そうなの。主人が車いすに座ったまま、私が用意する浣腸器で、私がされているのよ。」

夫「そうなのか、孝二さんもアナルが好きなんだね。孝二さんと知り合ったのは何か理由があったの?」

姉「うちの職場と彼の職場でお酒を飲む機会があつてね、それから交際が始まったの。主人は看護師に強く

興味を抱いていたんだって。それが始まりなのよ。」

夫「そうなのか。」

姉「そうだったのよ…」

夫「あかねが拒否しなければ自分もアナルSEX、やってみようかなあ。」

姉「そうね、最初はキツイけど慣れると気持ちがいいのよ。」

夫「そうか。だけど、あかねが好めばだけどね。」

姉「そうね、それじゃ水曜日を楽しみにします。今日はありがとう。」

夫「こちらこそ、ありがとう。」

メールはここで終わっていました。

「誰もそうだと思うけど、お姉さん達も他人には言えない夫婦生活があるのよね。お姉さんが結婚したのは何歳のころだったの?」

「23歳だったなあ。その時孝二さんは33歳だったと思う。確か10歳ほど歳が離れていたと思うんだ。」

「するとお姉さんは23歳からアナルセックスをされていたわけね。それに浣腸もされていたんでしょう? なんかゾクゾクするね。」

「姉が浣腸に興味を持ったのは小さい頃からだと思うし、孝二さんとはもう少し別の理由があったかも知れないけど、それ以上詳しくは聞かなかつたよ。」

「そうよね。私達も私達だけのことがあつたし。それは私達だけの秘密だものね。」

その日は結局午後10時で勉強を止めてリビングに移り、おつまみと、冷蔵庫から缶ビールを取り出して愛用のグラスで飲み始めました。

「ねえ、あかね。自分達はアナルSEXまでは考えてなかったけど、あれって気持ちのいいものかなあ。」

「男性器を肛門に挿入するんでしょう? とても痛そうだけど…」

「試してみないか?」

「試してみたいの?」

「試してみようよ。」

「少し怖いなあ…」

そんな話をしながら呑んでいましたが、その後二人はグラスに残ったビールを空けて、私の手を取り寝室に入りました。

3 アナルSEX

酔眼の私は全裸でベッドに腰を降ろし、ベッドのそばに立つ夫にどんな順序で行うかを尋ねてみました。

「最初はいつも通り600ccを浣腸して直腸内を洗浄し、指を使ってゆっくり肛門を拡張してみようか。」

「入るかなあ…けど先ずは浣腸から始めましょうか。」

夫は納戸の奥から200ccの浣腸器とプラスチックバケツを持ち出して、私もローションと1ℓの計量カップに洗面所で水を入れて戻り、ベッドの側に置いた椅子の上に計量カップを置きました。

ベッドの上で四つん這いになると、夫は私のお尻側に膝をつきました。そして浣腸器の嘴管、私の肛門や直腸内にローションを塗り、椅子に載せた計量カップから浣腸器で水を吸い上げて200ccを3回、計600ccを注腸しました。

600ccがお腹に入ると下腹部が張って、最近では上身体を起こして下腹部を右手で軽くポンポンと叩き、水が入ったことを実感するのが癖になりました。四つん這いに戻ると3分ほど我慢しました。グリセリンを入れてなくても、いつも通り腸内にジーンと痛みを感じ始めて、やがておなかからゴロゴロという音と共に排泄を促す蠕動が周期的に襲って来ます。

「もう出すよ。」

「うん、出して。」

私は上半身を起こして、ベッドから床に降りました。

床に置いたプラスチックバケツにお腰を降ろし、多量の水と少量の便、そして排尿をしました。

排便を終えると、夫は私の肛門と性器周辺をティッシュペーパーで押さえたまま床に四つん這いにさせて、その部分を何度となく綺麗に拭いてくれました。

そのあと、私は、ベッドの上で横になりました。

夫はバケツ内の排泄物をトイレに流して洗剤で洗い、引き出しの横に逆さまに置いてから寝室に戻りました。

私が再び四つん這いの姿勢を取ると、夫はベッドに載って中腰に膝をつき、右手指の全部にローションを塗ると、直腸内に一本ずつ指を挿入し始めました。

二本目まではスムーズに入りましたが、三本目を過ぎて四本目となると痛みが増します。

先ずは三本の指を挿入して3分ほど我慢させられました。

その後ティッシュペーパーで指を綺麗に拭くと、固く反り立った男性器にコンドームを着けてローションを塗り、再度私の肛門や直腸内にもローションを塗って挿入を始めました。

「入れるよ…」

「うん…」

しかしグイッと男性器が押し込まれると、そのキツさ痛さに驚き、

「痛いッ！」

と叫んでしまいました。

男性器を少しだけ入れた夫は私の反応に驚き、肛門から抜いてしまいました。そして、

「少しずつ入れるから我慢して…」

と言うと、再度男性器と私の肛門、直腸内にローションを塗って挿入を試みました。

「ウウウ…」

「我慢して…」

「ウウウ… 入ったの?」

「まだ1/3位…」

「うう… 痛い… やっぱ痛いよう…」

ゴリゴリと固いものが押し込まれているような痛みでした。

「奥まで入ったの?」

「七割ほど入った。」

夫は男性器をほんの少しだけ前後に動かしてアナルSEXを始めました。

しかしそのうちに男性器がしぼんでいくようで、結局直腸内では射精をせず、私の身体から男性器を抜き出して自分の手でしごいているようでした。

「どうなの、気持ちはやかったの？」

「あかねの肛門が切れないか心配で、結局男性器がしぼんだので外に抜いたよ。今一つの気分だったなあ。これで慣れるのかなあ。あかねはどうだった？」

「私も痛かった…」

肛門を優しくじっくり時間をかけてほぐせばと思いつつも、お姉さんはどのように我慢したのか聞いてみたいと思いつつ、自分で肛門とその周辺をティッシュペーパーで拭き取ると、パジャマを着て眠りにつきました。

4 火曜日の夜

土日月を経て火曜の朝が来ました。

夫は職場に出かけ、私は旅行鞆を持ったお義母さんを車に載せたあと、下の恵子さん宅で彼女を載せて町の駅まで降りて行きました。

繁子さんと温子さんに落ち合った後、駅構内の時刻表で明後日の到着時刻、17時20分をメモして四人を笑顔で見送りました。

その後坂道を上り、一階の駐車場所に車を止めて二階に上がりました。

ロビーと勉強部屋、寝室とトイレなどに普段よりも丁寧に掃除機を掛けながら、明日は二階の寝室で靖文さんの男性器をお姉さんと私が並んで交互に差し込まれるんだと想像していたとき、突然頭を棒で打たれたような激しい感覚が湧いたのです。

それは数日前から溜まり続けてきた、欲望そのままに性癖が拡大すると、先には必ず誰かに知られてしまうという恐怖心が爆発したような思いでした。

夫の帰宅後、入浴と夕食を済まして、午後11時から二階のロビーでビールを飲み始めたとき私が口にしませんでした。

「明日、お姉さんが来るのね…」

「どうしたの？ 顔色が悪いよ。」

「明日、私を外してもらえないかと思って… 私はやっぱり無理なの。どこかのファッションホテルでお姉さんと

二人で関係を持つてほしいの。」

「三人ではダメかい？」

「ごめんなさい。どうしても私だけは外して欲しいの…」

私はビールの入ったグラスをテーブルに置き、下を向きました。

夫は3PやアナルSEXが私を苦しめていると思ったようでした。

「3PやアナルSEXはダメなんだね。分かった、止めようよ。姉には中止を伝えるよ。」

「お姉さんとあなたがSEXするのは構わないの…」

「いいよ、自分も止めるよ。」

私の中止したい理由が実は「その逆」と言えないまま、少しのあいだ口を閉じていましたが、その後本心を打ち開けました。

「あのね、お姉さんと三人のセックスが嫌じゃないの。逆にね、好きなの。だけどね、このままでいくと私の性癖がどんどん膨らんで行くことが恐ろしくて…」

「エッ、3Pとかが嫌ではなくて、あかねの性癖が膨らむことが恐ろしいということ？」

「このままでいくと私の性癖に歯止めが掛からなくなってしまうそうで…」

「本当にそう思っているの？」

「本当なの。こんな事をしてるとね、隠していた性癖がお母さんに知られることになるんじゃないかとか。何かの理由で全く知らない人に私の性癖を知られたり、あの家には変わった性癖を持つ人がいるとか。また、生まれてくる子どもたちがその性癖が原因で他人から笑われたり、はては、子どもたち自身が社会性を失うことにもなったら、もう私、生きて行けない…私は靖文さんと二人だけで密かに楽しみたいと思ってるのに、このまま性癖が膨らむともうどうにもならなくなってしまうそうなの。それが恐ろしくて私…」

「そうなのか…」

その時私は目に涙を溜めていました。

「いずれにしてもあかねが止めるなら自分も止めるよ。」

「けど、お姉さんの期待を裏切るのが悪い…」

「あかねがダメなら止める。姉には自分が断っておくから。」

「けど、お姉さんに悪い…」

「相手は姉だよ。理由あつて断わることに全然問題はないよ。それは断るとしてだけど、少し落ち着こうよ。」
「なに?」

「あかねは将来に向けて自分の性癖が膨らむことを恐れているようだけど、将来のことを漠然と恐れてはダメだよ。具体的に考えようよ。」

「具体的に?」

「今30PやアナルSEXをすることで性癖が膨らむことが不安なら…例えば今ではなくて、50歳代や60歳代になってからでも、自分にとって絶対迷惑が掛からないと思える時期が来たとすればそのときに実行するか。否定ではなくて前向きに考えようよ。今は大きな恐怖感が目前に押し掛かって来て苦しいとは思って、漠然と考えていたら苦しみは長く続くと思うよ。問題があれば具体的に、前向きに対策を考えようよ。それと、あかねなら自分はこの不安というか問題は心配ないと思うんだ。」

「どうしてそんなことが言えるの? 私の性癖が膨らんでいくかもしれないよ?」

「普段のあかねを見ていたら心配無いと思うよ。」

「どうしてそう思うの? あなたに私の未来を預けてもいいの?」

「?」

「もし性癖が膨らんでしまいそうになったら私を繋ぎ止めてくれる?」

「必ず繋ぎ止める。厳しい折檻をしても必ず繋ぎ止める。」

そのとき私は夫への信頼感の高まりと、性癖の不安感解消に手立が見えた安心感から、ワーンと声を上げて泣いてしまいました。

泣き切った後、夫の前に頭を下げて、

「私はあなたの庇護のもとで一生を過ごさせて頂きます。」

と言いました。夫は、

「あかねを一生私の腕の中で見守る。」

と言つて下さいました。

私はそのとき本当の意味で夫の『愛の奴隷』にさせて頂いた実感を持ちました。

そして次のメールを書いて私に見せてから、直ちにお姉さんに送りました。

「お姉ちゃん。明日の件、本当に急で申し訳ないけどあかねが泣き出してしまったね。お姉ちゃんには申し訳ないと言っているけど今は混乱しているようなので今回は中止させて下さい。お願いします。」

.....

.....

.....

深夜でしたが15分ほどしてお姉さんからメールが届きました。

私に伝えて欲しいと言うことで

「あかねちゃん、明日の件了解です。私こそごめんない無理な要求をして。キャンセルをしてもらって良かったです。ただ私とは引き続き良い関係が続けて行きましようね。松本の家を守るあかねちゃんへ」と書いてありました。

それを見て再び声をあげて泣き続け、私は夫に手を引かれて寝室に入りそのまま眠りにつきました。

5 水曜日の予定

朝6時、目を醒まして身支度を整えました。

母屋の炊事場で朝食をこしらえながら愛犬にエサを与え、7時には居間で二人朝食をとり始めました。

そのとき夫が私に今日の予定を尋ねたのです。

「今日一日、何の予定も無いよ。」

「それなら自分の趣味だけど、ヨコハマランドマークタワー近くの三菱重工業ビル五階にある、模型飛行機の展示施設と一緒に観に行かないかい？ 片手で持てるくらいの小さな飛行機でも一機100〜200万円程もするものが200機を超えて観られるらしいんだ。それを観たらあかねが好むレストランにでも行って、何か美味しいものを食べようよ。」

昨夜辛くて泣いてしまった私を気付かっただけのこととは分かっていました。

「うん、行きたい...」

10時過ぎに、お昼には帰れないからと愛犬に余分のエサを与えて夫の車に乗り、1時間30分程掛けてみな

とみらい地区に着きました。

三菱重工業ビルの駐車場に車を止めて五階の展示施設に着くと、第二次世界大戦中の飛行機を中心に、現在の宇宙船までが飾られていました。小さくても精密な構造に驚きながら会場を観て回りましたが、いつの間にか気分が一新していることに気付きました。

「あかね、お昼はどうしよう。どこかいいレストランでもあれば教えてよ。少々高価な店でもいいよ。」

「本当にいいの？」

「いいよ。あの四人組が今ごろ美味しいものを食べながら観光地を巡っているんだよ。我々だってたまには美味しいものを食べようよ。」

「そうよね、確かに。どこがいいかなあ…あつ！それじゃあ私が以前行ったことがある中華街の店で、美味しいものを何品か選んで食べない？私、素敵なお店を知っているの。」

「そこに行こう。自分は横浜中華街にあまり来たことがなくて。」

その店は中華街の南にありました。

近くの駐車場に車を止め、歩いて目的の〇〇酒家まで行き、一時間ほど掛けて二人で8品を平らげました。

「本当に美味しかったね。」

「うん、美味しかった。この店は私が独身の頃、会社の友達数人と食事をした店なの。もう五年ほど前だけど今日来られてよかった。美味しかったし、懐かしかったわ。」

「ねえ、突然だけどあかねの実家に寄って行かないか？結婚して以降二度ほど行ったけど、最近は大失礼しているから。」

「私の実家に？そうね、行こうかなあ…」

「行こうよ。」

「行こうか！」

「それじゃお土産を買っていいこう。横浜で良いお土産というところがあるかなあ？」

「そうねえ、横浜なら横浜シユウマイ？普通のお菓子よりも好まれると思うの。」

「いいね、桜木町駅で買おうよ。自分は駅前の道沿いに車を止めて待っているから。」

「分かった！行ってくる。」

私は桜木町の駅構内で横浜シユウマイ一箱2千円を買って停車中の車に走り、一路実家の武蔵溝の口に向けて車を走らせました。

実家に着くと庭に車を入れて、私が先に車を降りて扉のチャイムを押し、母に久々の来訪を知らせました。

「お母さんいる？ 靖文さんと一緒に来たのよ。」

母がチャイムに応えた後、扉を開けて出てきて、

「まあ、二人できたのね。会いたかったわ。靖文さん、ご無沙汰しています。」

と声を掛けました。

「お母さん、こんにちは。今日は久々に年休を取ったのでこちらにも寄らせて頂きました。」

「まあ嬉しい、家が上がって頂戴。あかねは良くしていますか？」

「はい、大変良くしてもらっています。」

お母さんにお土産を渡し、夫の趣味の模型飛行機を見て、横浜中華街で食事をしてから実家を訪れたことを告げました。勤務のお父さんには会えませんでしたが一時間を超えて歓談し、その後二時間程掛けて山の上のわが家に帰り着いたのは午後5時を過ぎていました。

「靖文さん、今日はありがとう。楽しかったし忘れられない日になったよ。」

「自分こそ飛行機の展示施設と一緒に行ってくれたし、中華街のあの店も美味しかった。それにあかねの実家にも行けてよかった。」

夫は昨夜の辛いことを忘れさせるために連れて行ってくれたのに、そのことは一切口に出さず、本当に感謝以外の何物でもありませんでした。

お風呂を沸かし夕食を作りました。夕食後は二人とも昼間の疲れで、勉強はせずに二階でビールを飲んで眠りにつきました。

木曜日、夫は出勤して私は昼間の用事を済まして17時には駅に着き、その後四人を迎えました。

繁子さんと温子さんとは車で別れ、恵子さんとは彼女の家前で別れました。

お義母さんと私が家に着いたのは夫が帰るほぼ同時刻でした。

6 実家の母から電話

10日ほどして、お昼ご飯を済ませてお義母さんと一緒に居間でテレビを見ていたとき、溝の口の母から電話がありました。

「お母さんこの前は有難う。今日はどうしたの？」

「この前はありがとうね、シユウマイ美味しかったわ。実はね、来週の土日月で新潟の麻衣ちゃんが良則さんの運転で赤ちゃんを連れて家に来るのよ。それでね、お父さんが靖文さんとあかねちゃんも一泊で出て来られないか聞いてみると言うのよ。美味しいものも準備するから二人で出てこれない？」

「麻衣姉ちゃんが溝の口に来るんだ…会うのは出産のときに病院で会って以来だね。靖文さんが帰ってきたら都合を聞いてみる。懐かしいし会いたいなあ…今晚また電話するね。」

「そうして頂戴、待っているから。」

母はそう言いつて電話を切りました。

夕食時にこの話をしました。

「麻衣さんにはこれまでに三度お会いしているし、ご主人にも一度お会いしたなあ。みんなに会えると嬉しいよ。」

「新潟に行つたお姉さんとご主人、お孫さんが実家に揃うと御両親も嬉しいでしょうね。あなた達も是非行ってきたらいいわ。」

夕食後、実家に電話を掛けてお母さんに二人で一泊することを伝えました。

土曜日の昼食後、お義母さんと愛犬に手を振り、夫の車で坂道を降りて、町のスーパーマーケットでビール一箱と地元産物をお土産に溝の口を目指しました。

7 家族の懇親

二時間ほどで武蔵溝の口の自宅が見えて来ました。

「庭にワゴン車が来ている。あの車で来たんだね。」

「ワゴン車に乗っているのね。」

「車二台は止められたよね。」

「うん、止められる。ワゴン車の後ろにヒタリ着けて！」

車を降りると、家の中からお母さんと赤ちゃんを抱いた麻衣姉ちゃん、その後をお父さんと良則さんも出て来て久しぶりの親交を温めました。

ビール一箱と地元の産物を二人で分けて持ち、全員が家に入ると既に料理が準備されていて、ビールとお酒を準備してすぐに懇親会が始まりました。

午後9時を過ぎて、お酒などを十分呑み切ったお父さんたち男性三名はそれぞれが眠る部屋に行き、イビキをかいて熟睡しました。

寝る場所は事前に決めてあり、二階の私の部屋は床に私が寝られるように布団が敷いてあります。酔った夫を、ベッドに眠らせてから一階に降りてきました。

私たち三人は六畳の部屋を片づけた後、順番にお風呂を済ませて四畳半の部屋に移りました。残った料理と冷蔵庫から出したビールとお酒を沸かして改めて三人で呑み始めました。

「みんなが来てくれて本当に良かったわ。」

「私も久々の実家が懐かしかったわ。良則さんは、最初東京で暮らすと言っていたのに二年ほどで新潟に帰りたいと言いついてね、私も迷ったけど腹を決めてついて行ったの。けど新潟は思いのほか良い所だね。また良則さんは次男で、新潟のお父さんの援助でマンションを購入したの。新潟は冬は雪も多い所だけど景色も良いし食べ物も美味しい所だからみんな来てね。美味しい日本酒もあるのよ。」

「麻衣姉ちゃん、日本酒は美味しいの？」

「新潟はビールより日本酒を飲む人が多いの。だから私までが日本酒通になってしまったのよ。」

「そうなんだね。私は夫と二階の部屋で毎夜ビールを飲むのよ。」

「二人ともお酒を飲む量が増えてない？ けど、麻衣ちゃんもあかねちゃんも良い人をご主人に迎えて、私もお父さんもそれが嬉しいのよ。」

「麻衣姉ちゃん。私の住まいは山奥のまた奥、海拔5百メートルを超える所だけど、自然が一杯とても綺麗な所なのよ。絶対に一度は来てね。」

「行つてみたいなあ… そうだ、溝の口には明後日までいるから、明日あかねの家に行けないか良則さんに聞いてみようかなあ。」

「是非お願いして。一度来て貰いたいの。」

「二人が行くなら私もまた行つてみたいわね。以前お父さんと二人、近くの駅からタクシーを使って訪問したけど、本当に綺麗な所だったのよ。」

「麻衣姉ちゃん、明日良則さんに頼んでみてよね。」

「分かった。明日の朝相談してみるね。」

三人はビールとお酒を飲みながら話は尽きませんでした。

暫くしてお酒に酔つたお母さんが突然こんなことを言い出したのです。

「そう言えば、麻衣ちゃんもあかねちゃんも悪い子のお母さんがこの部屋で、「あれ」して反省させたわね。今はもう必要はないの?」

「イヤねえ、お母さん。よしてよ、悪い子じゃないから。」

私は反射的にそう応えました。

「私だつて、悪い子じゃないわ。」

「そうよね。麻衣ちゃんもあかねちゃんも良い子だものね、よかつたわ。」

その時、麻衣姉ちゃんが言ったのです。

「お母さん、私たちが家を離れて「あれ」出来なくて寂しくはなかつた?」

「寂しくは無いわよ、「あれ」は良い子どもたちに育てるためにしたことよ。」

「だけどお母さん。昔お父さんは「あれ」が嫌いだから、三人だけの秘密にしてなんて言っていたことを覚えていてよ。」

「そうだつたかしらね… 忘れたわ。」

「それはそうとあなたたち、便秘の時はどうしているの… やっぱ便秘薬なんかを使うの?」

「私は便秘解消のために浣腸器を買つて持っているのよ。ネットで注文したの。お腹が張つて何日も出ないときには夫に頼んで浣腸をして貰っているのよ。」

「良則さんに浣腸して貰っているのね。あかねちゃんはどうなの、便秘のときは?」

「私はお義母さんが浣腸器とグリセリンを自分の部屋に置いていて。今までに二度して貰ったの。」

「お義母さんにして貰ったの?」

「二回とも十日以上出なくて…あの地域は昔から病気になつても下の町からは距離が離れていてすぐにお医者さんと呼ばなくて。先ずはどの家庭でも浣腸をする習慣があるみたいなのよ。だからしてもらったの。」

「昔は何処の田舎でも浣腸の習慣はあつたのよ。お母さんが育つた千葉の田舎もそうだったわ。けどお義母さんにお尻を見られて恥ずかしくはなかつた?」

「最初は恥かしかったわ。けどね、お義母さんが浣腸器を出して来て…浣腸は昔から生活していくための必需品と聞かされて、それでされたの。最初はとても恥ずかしかったけど二度目は慣れたわ。やっぱり便秘薬より浣腸の方が効果てきめんだもの。」

「二人とも必要に応じて浣腸をしているのね。使うことは賛成よ。」

「お母さんは使つてないの? 私達によく使つていたのに。」

「使つてないわよ。」

「お母さん…私、思うんだけど、浣腸を好む性癖を持つていなかった? 人によってはその性癖が子どもにも移ると本に書いてあつたことを覚えているよ?」

「そんな性癖なんて無いわよ。それにもう十年以上使つてないから…」

「そうなのね。それじゃ性癖じゃなかつたのね。」

「麻衣ちゃんはどうなのよ。浣腸に性癖を感じたことがあるの?」

「私、少し性癖めいたものがあるかもしれない…」

「そういうことはあるかも知れないわね。浣腸つて場所が場所だけに弄つてみたい気持ちも起るかも知れないのよね。」

そう言うお母さんの声が少し意味ありげに聞こえたのでした。

すると酔つた麻衣姉ちゃんが、

「お母さん、そう言えばこの部屋の押し入れに浣腸器を置いていたよね。今も置いているの?」
と聞いたのです。

「エッ、浣腸器? そうね…あつたと思うけど…」

お母さんの意味ありげな声がなぜかたちまち慌てた声に変わったのです。

「その浣腸器、見てもいい？ お母さんが悪いことに使っていないか調べてみたいの。いいでしょう？」

「そんなことしなくてもいいわよ……」

「ダメよ、お母さん」

「アツ、そういえば5年ほど前に使ったことがあったと思うわ。便秘解消のためよ……ねえ、麻衣ちゃん、使っていないらどうなのよ。私も便秘解消のためよ！」

「そうよね。便秘解消がよく調べて、もしそれ以外の目的で使っていたら……今度は私たちがお母さんにお仕置きするの。いいでしょう？ 良いお母さんになるためには必用だから。」

「あかね、出して来て。」

私も以前からされてきた50ccの浣腸器が懐かしく思えて、その場で立ち上がり、押し入れを開いて薬箱から浣腸器が入った箱とグリセリンの瓶を取り出して机の上に置きました。

「あれっ、箱が以前より大きくなっているんじゃない！ それと……あれっ、何？ グリセリンの製造日が今年じゃないの、お母さん！」

私は驚いて言ったのですが、箱から出てきた浣腸器はいつの間にか50ccが100ccに替わり、グリセリンも今年製造したものでした。

お母さんは頭を下げればらく黙っていました。

今度は麻衣姉ちゃんが言いました。

「お母さん、ダメじゃないの。今から浣腸しておきましょうね、良いお母さんになるために。あかねも手伝って！」

驚きの展開でしたが、酔ったお母さんは無言のまま立ち上がり、茶系のスカートのホックを外して畳に置きました。

続いてパンティを脱いで四つん這いの姿勢を取りました。

「あかね、200cc浣腸をしましょう。準備して！」

私も酔っていました、言う通りに台所に行つて大きなコップに100cc程度の水を汲みました。

部屋に戻つてグリセリン100ccを入れて200ccの浣腸液を作りました。

そして私が横から中腰でしゃがみ、四つん這いのお母さんのお尻を両手で広げました。

浣腸器を持った麻衣姉ちゃんも中腰にしやがんで、コップに入った浣腸液をヒストン3、4回上下して攪拌し、二回に分けて200ccを注腸して、空になった浣腸器をテーブルに置きました。

そのとき見たお母さんの女性器や、畳に置いたパンティのクロッチ部分が酷く濡れていました。

やっぱり私や、きつと麻衣姉ちゃんも義理とはいえ、お母さんの性癖を引き継いでいること、またお母さんが小さいときから私達二人を横に並べて浣腸していた姿が過去のものではなく、今は私達がお母さんに浣腸する姿も含めて、三人が一生の深い結びつきであることを改めて私は感じるのです。

お母さんは四つん這いのまま頭を下げていましたが、その時にはお腹のグリセリンが暴れ始めた頃だと分かりました。

まもなくお腹を強い痛みが襲っていることは顔のゆがみから見分かりました。

麻衣姉ちゃんが言いました。

「お母さん、出来るだけ我慢してね、すぐ出すと浣腸薬しか出ないから。」

「酷いわね、分かったわ…」

やがておなかがゴロゴロという音を出し始めて、排泄を促す蠕動が周期的に襲ってくるようになり、

「お母さん、トイレに行つて来て。」

と言うと、お母さんは無言で立ち上がり、下半身裸でトイレに向かいました。

ドアをバタンと閉めると、ジャージャー、ブリブリブリブリと大きな音が聞こえて来ました。

その後、私は浣腸器とコップを台所で洗い、グリセリンの瓶と共に押し入れの薬箱に戻しました。

トイレから出てきたお母さんは、

「今夜のことは私達三人の秘密よ、分かったわね！」

と言うと、着衣を整えた母と一緒に食べ物や酒類の器を綺麗に洗い、部屋を掃除してそれぞれの部屋に戻って行きました。

翌朝、私の家に訪問したいと麻衣姉ちゃんが良則さんに話をしていました。

「靖文さん、麻衣から聞いたのですが、私たちは月曜日まで溝の口に居るので、今日は靖文さんのお家を私がお母さんと麻衣と赤ん坊と共に訪問できたらと思うのですが如何でしょうか？」

「そうですね。是非来て下さい、歓迎します。ここから車で二時間ほどの距離で、山道は曲がり道が続きます。昔の〇〇街道と呼ばれる道で、山頂に至る100mほど手前を右に折れて100mほど走った所に私の家があります。」

「是非行つてみたいです。車で後を追いかけますから。」

晴天の午前10時過ぎにお父さんにお礼を言つて、夫と私の乗る車に良則さんのワゴン車が付いて溝の口を離れました。

途中、レストランで昼食をとり、午後1時過ぎに自宅に帰り着きました。

私たちの車は一階の駐車場所に入れて、後ろを付いて登つて来た良則さんのワゴン車は庭に着きました。

前の畑で農作業をしていたお義母さんは突然の来訪に気づき、作業を止めて家に歩いて来ました。

「お母ちゃん帰つたよ。あかねのお姉さんご夫婦と赤ちゃん、それと溝の口のお母さんにも来てもらったよ。」

「お義母さん、ただいま。」

「お帰り。あかねちゃんお帰り、お姉さん達やお母さんも来てくれたのね。」

「お義母さん、ご無沙汰をしています。また寄らせて頂きました。いつ来ても素晴らしい景色ですね。」

「山下です。これは妻の麻衣と長男です。昨日から溝の口に来てまして、今日は靖文さん達に無理を言つて家に寄らせて頂きました。」

「まあまあ。わざわざ来て頂いて、本当に有難うございます。随分遠かったですね。まあ、コーヒーでも入れましょう。あかねちゃん、コーヒーをお願いします。」

「はい、準備します。」

「良則さんは新潟の方なのですね。私はまだ行ったことがありませんが良い所でしょうね。また、お隣の方があかねちゃんのお姉さんですね。あかねちゃんはこのあたりでは評判の可愛い美人と言われていますが、お姉さんはテレビに出ても不思議でないほどの素敵な方ですね。」

「そんなことはありません、大袈裟です。」

全員が居間に入り腰をおろして、私が点てたコーヒーを飲みながら親しく会話を交わしました。そのあと、家周辺の風景を一緒に歩いて廻り、再び居間に戻りました。

「あかねは車を止めた建物の二階にいるの？」

「うん、お姉ちゃん見てみる？二階からの景色も良いのよ。」

「あなた、二階の部屋に上がってもいい？」

「迷惑にならないければ。」

「お兄さん、迷惑にはなりませんから。」

私は姉をつれて二階に上がりました。

お義母さんと夫は溝の口へのお土産にと、納屋にある山菜の漬物を出そうとしていました。

出すところが見てみたということで、残る全員は納屋に付いて行ったようでした。

「麻衣姉ちゃん、ここがリビング。その隣りが勉強部屋なの。勉強部屋には私の机と椅子もあるのよ。パソコンは負担も大きいけど二人それぞれに持っているの。」

「凄いわね、何か受験勉強でもしているの？」

「私は特にはしてないけど夫は每晚9時から11時までの二時間、仕事に関する勉強をしているの。その後、リビングで每晚一緒にビールを飲むのよ。」

「いいわね。ところで下からは見えなかったけど、二階に上がると遙か遠方に見えるビル群のような…あれは横浜の街かしら？」

「そうなの、横浜が見えるのよ。それとね、下から上につながる山の木々も綺麗でしょう？今は紅葉のカエデや柿の木などが所々に見えるの。」

「本当に素晴らしい場所ね。」

リビングで椅子に腰を掛けて二人で話をしましたが、昨夜のことに話が進みました。

「あれはね、偶然から始まったけど、結果的にお母さんの性癖を満たしてあげたのよ。」

「そうよね。」

「ええ。それで実はね、お母さんの性癖が私にも移ったのかも知れないの。絶対に誰にも言わないでね。私たち夫婦、浣腸マニアなの。」

「うん、分かった。誰にも言わない。私も以前ネットで読んだことがあるの… 血が繋がってなくても小さい頃からの経験が性癖に影響すると書いていたことを。」

「そうだと思うの… 他人に知らなければそれでいいのよ。お母さんも後妻としてわが家に来て、お父さんが浣腸に興味を持たなかったから私たちにしたと思うのよ。」

「そうよね、分かる。」

その時下から、麻衣姉ちゃんに帰宅の音が掛かりました。

「はあい、すぐに降りてゆきます。」

私は下に降りようとする麻衣姉ちゃんの右手をつかみ、小さな声で言いました。

「麻衣姉ちゃん、私について来て。」

「なに？」

「ついて来て！」

リビングから寝室を通り、その先の納戸を開いて、衣類を吊るした一番奥の大きな収納庫に連れて行きました。

引き出し三段を全て開いて見せました。

上から一段目は200ccの浣腸器や1ℓの計量カップ、ローション、3ℓのイルリガートルなど。

二段目は複数のバイブを始め大人のおもちゃや鞭、手錠など。三段目は性的な書籍等。

そして引き出しの横にはプラスチックバケツが逆さまにして置いてあり、それを見た麻衣姉ちゃんはアツと目を見開き、息を止めました。

「あかね、大きな浣腸器で浣腸されているのね… 鞭なども使われているの？」

「うん…」

じつと収納庫の中を見続けた姉は、私が姉と同じ性癖を持っていることを確認するかのよう

「やっぱりそうなのね。」

と言うと、こわばった顔が笑顔に戻りました。

階下に降りると、お義母さんと夫が荷造りをした山菜の漬物がワゴン車に載せてありました。

私たち三人が見送るなか、ワゴン車は坂道を降りて行きました。

靖文さん、今回の文章はどうだった？ 母のことをあなたに知らせました。

私の家、恥ずかしい家だったでしょう？ また、一番悪いのは麻衣姉ちゃんに心階の収納庫を見せたこと。

これは私たち姉妹の性癖が同じと知らせたかったのですが、あなたと私以外には絶対誰にも見せてはいけないものを見せてしまいました。

この上はどんな折檻にも耐える覚悟です。

どうかあかねに厳しい折檻をしてお腹立ちを静めて下さい。お願いします。

あかね

【靖文 letter】

あかね、3Pの件、この文章からも苦悩する状況がよく分かりました。中止は姉も充分解つていると思います。これからも私とあかねは一心同体で暮らさせて下さい。お願いします。

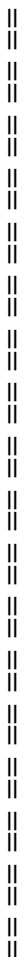
実家のお母さんの件、全く恥ずかしいと思いません。恥ずかしいなら自分達が数倍恥ずかしいです。誰も知らない所で行うことで全く問題ないです。

麻衣さんに収納庫を見せたこと、それは自分と姉の関係と同じで全く問題ないです。

あかねがこのように文章を書いて私に読ませて貰えることで安心感が一層増します、有難う。また期限なしで次回を待ちます。

一つ書かせて。あかねに折檻を試みたくなくなった。

自分がムラムラする楽しみのための折檻だからそれは十分理解してね、二人で楽しめればいいと思う。時機をみて折檻をします。素直に受けるように。折檻の方法は後日申し付ける。



あなたに折檻を与えて頂きました。

お義母さんがいない土曜日の午後折檻を言い渡され、あなたが勉強をする間、そばで「座り緊迫」の責めを与えて頂きました。

実施日時 十月〇日(土)13:30~15:30

罪状 姉への秘密漏洩(あかねの申し出)による「座り緊迫」

場所 二階 勉強部屋

【苦しかったこと】

- ・ 全裸で200ccを流腸した後に紙おむつを履かされ、防水シートを掛けた布団の上に座り、ロープによる座り緊迫、手錠締めを二時間与えて頂きました。
- ・ 折檻中に三度、バラ鞭を全身に頂きました。
- ・ 二時間、口をタオルで塞がれていました。

【うれしかったこと】

- ・ 紙おむつを脱がせて綺麗にお尻の汚れを拭いて頂きました。
- ・ そして、ご主人様である靖文さんが、女囚『愛の奴隷』のあかねを厳しく折檻して頂きましたこと、誠にありがとうございました。

ご主人様 松本 靖文

女囚 松本 あかね